

1997年6月8日東南アジア史学会報告

「タイ仏印紛争、タイの対ラーオ・クメール・ベトナム宣伝・共闘工作」要旨

村嶋英治

日本人タイ史研究者の一部には、タイ国立公文書館などの一次文献を本格的に利用したことがないにも拘わらず、これを軽視する傾向が存在する。この傾向と単純なる事実の間違いが研究論文の中においてさえも枚挙に遑ないほど存在していることとは無関係ではない。日本のタイ史研究は未だ満足できる水準にあるとは言えないのである。本報告ではこのような研究状況を念頭に置きつつ、「東南アジア史の中のタイ」に適合する1940-41年時のタイとインドシナとの関係をテーマとした。

タイがフランスに失地回復を要求したことにより、1940年後半から1941年3月にかけて生じたタイ・仏印紛争において、タイ政府はフランス支配下のラーオ、クメール、ベトナム人に対して反仏闘争を呼びかけ、かつインドシナの反仏運動との連携・共闘工作を試みた。しかしこの事実は資料不足もあってこれまで殆ど明らかにされてはいない。本報告では宣伝局広報月刊誌、*Khao Khosanakan* などを用いて、タイの対インドシナ人への宣伝を概観した後、タイ国立公文書館 (NAT) 及びタイ外務省文書課の保存文献などの中に僅かに散見する史料によって連携・共闘工作の実態を明らかにしたい。

タイ政府は宣伝においてインドシナのラーオ、クメール、ベトナム及びタイ人を包括する概念としてレームトーン (Laem Thong, 黄金半島) 人を多用し、レームトーン人の対仏闘争への団結・共闘を訴えた。タイ政府はレームトーン人を大きくタイ族とベトナム族の二族に大別し、ラーオ、クメールをはじめラオス、カンボジアの土着民は全てタイ族に含ませた。このような分類によって、タイの旧領土であるラオス、カンボジアの人々の闘争目標は反仏タイ復帰による自由平等なタイ族統一国家の建設にあるとし、一方、かつて独立国であったベトナム人の課題は反仏独立革命であるとした。

40年9月始めからタイ政府はインドシナ住民 (ベトナム人を含む) のタイ移住を呼びかけ始めた。41年3月までには2万人近い人がタイ内に移住してきた。その多くは農民であったが、少数の革命の闘士も含まれていた。ラオスに対しては、1940年9月末よりタイ政府はラオスの副王の家系出身で最高級官吏であったペサラートとの連絡を試みた。12月にはタイ政府の宣伝にラーオ人上級官吏のウン・サナニコンらが呼応した。これはラーオ・イサラ (自由ラーオ) 運動の源流となった。また、41年1月のチャムパーサク侵攻の前より同地の支配者チャオ・ラーチャダナイ等は対タイ協力を行った。

クメール人指導者としては40年11月からクメールの上級貴族の家系出身のプラ・ピセートパーニットが積極的に協力を示し、彼によって12月にはクメール・イサラの大会がバンコクで開催された。ラーオやクメール人が反仏タイ復帰を願ったか否かは疑問であるが、タイの反仏闘争の呼びかけはラーオ、クメール人に一定の協力者を獲得したことは明らかである。

ベトナムについては、タイ政府は1940年9月末にはバンチョン領事をサイゴンに派遣して軍事情報の収集、謀略宣伝などの工作に従事させた。ベトナム人指導者としては、在タイ経験をもつ法律家ドアン・ワン・ヤオがバンチョン領事とも連絡を保ちながら、コーチシナにおけるカオダイ教徒の蜂起反乱（40年11月～）に貢献した。タイ政府はタイ仏印紛争がタイ陸軍のインドシナ進攻開始によって最も激化した41年1月始めにはベトナム人などから成る「インドシナ独立軍」の成立をも発表した。しかし、盛り上がったレームトーン人との団結・反仏共闘の意欲は1月末に日本の介入により停戦が成立したのちは急速に消滅した。

1997年6月8日東南アジア史学会報告

「タイ仏印紛争、タイの対ラーオ・クメール・ベトナム宣伝・共闘工作」

村嶋英治

はじめに

I タイの対インドシナ宣伝

- 1、レームトーン（黄金半島）人というアイデンティティと共闘の論理
- 2、クメール＝タイ族説の根拠

II タイの対インドシナ工作と成果

- 1、インドシナからの移民奨励
- 2、対ラーオ共闘工作
 - （1）ペサラートとの連絡
 - （2）ウン・サナニコンとラーオ・イサラ運動の開始
 - （3）チャムパーサク王家の協力
 - （4）サイヤブリー解放
- 3、対クメール工作
- 4、対ベトナム工作
 - （1）バンチョン駐サイゴン領事
 - （2）カオダイ教徒の反乱とドアン・ワン・ヤオ
 - （3）ベトナム人部隊の結成

文献資料

脚注

はじめに

タイは1867年から40年間に4回の条約によりフランスからラオス、カンボジアの46万7500平方キロの領土を奪われた。1930年代に入るとタイ軍の定期刊行物等は領土喪失の歴史に関する論文を掲載するようになり、更に32年立憲革命を経て人民党グループの政権が安定した35年頃からは陸海軍を中心に失地回復熱が見られるようになった。しかし有力なフランスが存在する限り、タイ政府が現実にはできたことはメコン河内の島の帰属を変更するという程度の小規模な国境線改訂の提案に止まった。

40年6月にフランスがドイツへ屈服し、一方日本が仏印への軍事進駐を要求するようになるとインドシナ情勢は大きく転換した。9月11日にタイはヴィシー政権に当面はメコン河を国境線とする国境改訂を行い、将来仏印の主権者に変更がある場合にはタイの全失地を返還するという保証を求めた。メコン河を国境線とすることにより先ず失地の一部回復を図ろうとするタイの要求を仏印は二度に渡って拒否。9月末ピブーン政権は断固失地回復を実現することを決意した。対ラオス工作を開始したのはこの頃である。

10月に入るとタイ政府は全国各地で官製デモを組織し、義勇軍志願者と募金を募り、軍事行動の準備を進めながら、一方で、イギリスの斡旋による外交的解決にも期待したが成果はなかった。11月13日にタイは野戦軍組織を公表し臨戦態勢に入った。同じ頃南ベトナムに生じたカオダイ教の反乱にタイ側は大きく期待した。

1940年11月28日にタイ仏印間は相互空爆によって戦端を開き、1月5日からタイ陸軍は国境を越えてインドシナに進撃した。この武力衝突期間において、タイは最も熱心にインドシナ各民族の反仏闘争を呼びかけ、かつ反仏闘争との間に連携と共闘を試みた。一方、裏面では仏印に譲歩させ妥協する機会を探したが、成功しなかった。結局、1941年1月末に日本の介入により両者は停戦し、東京での調停会議によりタイは41年5月9日の条約でメコン河右岸（西岸）部分のルアンプラバン対岸地域（サイヤブリー）とチャムパーサク地域、及びカンボジアのタイ国境に接するバツタンバン、シアムリアップ地方などを回復した。回復した領土の大半は既に1月にタイ陸軍が占領し軍政を布いていた地方であった。戦後の46年11月17日にはフランスは英米の後押しを得てタイに41年条約の無効を認めさせ、タイは回復した領土をフランスに返還した。

実質4年間で終わったタイの「失地回復」とは、第二次世界大戦でフランスが崩壊しつつある機会に乗じたピブーンら軍事独裁者たちが、日本軍の威を借りてラーオ、クメールなど異民族の住む僅かばかりの領土を奪取したものに過ぎず、日本の敗戦とともに元も木阿弥に帰した取るに足りないエピソードであるという見方は少なくないと思われる。

しかし、上記の見方はタイの反仏失地回復運動が東南アジア大陸部の現代史上にもつ重要性を閑却している。失地回復運動は、タイ官民の一致したナショナリスティックな熱望が

発露したというタイ史上の重要事件であっただけに止まらず、タイがレームトーン (Laem Thong、黄金半島) 人というアイデンティティの下にラーオ、クメールには反仏タイ復帰のための解放闘争を、ベトナムには独立革命を呼びかけ、彼らとの連携・共闘の具体化を試み、ある程度の成果を得たという点において全インドシナの広がりをもつた反仏闘争であった。日本の介入により停戦が成立したため反仏共闘は短期間で中断されたが、タイと共闘した反仏独立運動グループの中には戦後の独立運動に連続したものも存在することも無視できない。

本報告では宣伝局資料を中心にタイ側の対インドシナ宣伝を述べた後、タイ国立公文書館 (NAT) 及びタイ外務省文書課などの資料中に僅かに散見する関連文献を用いて、タイの対インドシナ共闘工作を明らかにすることを試みる。

I タイの対インドシナ宣伝

1、レームトーン (黄金半島) 人というアイデンティティと共闘の論理

タイ仏印紛争時においてタイ宣伝局は対インドシナ向け宣伝放送として、サイゴン放送のタイ語番組に論争を挑んだことで有名な「ナーイ・マン、ナーイ・コン」番組などのタイ語放送の他に、40年11月5日よりクメール語放送、11月16日からはベトナム語放送も開始した。これらの放送によってタイ政府はインドシナからタイへ移住することやインドシナにおいて反仏闘争に蜂起することを呼びかけ、かつ支援を約した。またタイ軍のフランス軍に対する戦果や在タイ・インドシナ人の反仏革命組織の成立なども発表した。

反仏インドシナ向け宣伝は、タイの旧領土であるラオス、カンボジアのラーオ、クメール人に対してのみならずベトナム人に対しても行われた。タイをも含めて、これらのインドシナ諸族を総称する概念として、「レームトーン (黄金半島) 人」が頻用された。タイのいうレームトーン人は、フランス人との対比において「同じ皮膚」と「同じ血統 (チュア・チャート)」を共有しており、また仏教*1 信仰を共有すべきであり、何よりもフランスを共通の敵とすべきであった。レームトーン人に対してはタイ政府は差別なくタイへの移民を歓迎した。その中には当然ベトナム人も含まれていた。タイ人がベトナム人をライバル視せず、ベトナム人への同情と連帯意識をもったこの時代はタイ史上でも稀な時代である。

文献1、2は40年12月20日付けの内務省布告とこの布告に関する内務大臣から各県への通達である。これは11月28日以来タイ仏印間に相互空爆やメコン河などの国境線を挟んだ相互銃砲撃など交戦が続くなかで、タイがインドシナにおけるフランス主権を全く無視して、仏印のラーオ、クメールを始め「タイ族」を無条件にタイ国籍とし、ベトナム人については従来のようにフランス籍とは扱わず独立国の待遇を与えてベトナム籍として取り扱うことを宣言したものである。

両文献に見るようにレームトーン人はタイ族 (チュア・チャート・タイ) とベトナム族 (チ

チュア・チャート・ユアン) の2族に大別され、ラーオ、クメールを始めラオス、カンボジアのベトナム人を除く土着民は全てタイ族に包含されている。

ピブーン首相は40年10月20日の有名なラジオ演説(文献3)で「クメール地区やラオス地区の我が兄弟についてはタイ族ではなくクメール族とかラオス族であると理解している者もいようがこれは間違いである。クメールやラオスはバンコク、チェンマイなどと同様地名に過ぎない。チェンマイの住民がタイ人であると同様クメール地区やラオス地区の住民もタイ人である。我々と血は同じタイであり兄弟である。」と語っている。ラーオが大きく分類すればタイ族に属することは疑問の余地はないが、クメールのみならず、文献4に見るようにラオスのカー族までもタイ族とされた。このようにクメール、ラオスの領域に住む土着民を全てタイ族とした理由は、両地域を回復すべき旧領土と考えるタイ指導者にとっては失地回復の正当化の論拠が必要であったからであろう。

タイの宣伝では、抑圧差別と苛斂誅求のフランス支配に比し、自由と平等という立憲革命の新政治原理に基づき統治するタイ国は理想郷である。フランスの侵略によって分裂状態にあるタイ族はタイ族の失地を回復して、民族統一国家を実現すべきである。^{*2} ラオス、カンボジアはタイの旧領土であるだけでなく、その全土着民は全てタイ族であるから、彼らの目標はタイ復帰でなければならず、そのための反仏闘争に立ち上がるべきである。また、異民族支配に苦しむ気の毒なタイ族同胞を支援することは同族であるタイの当然の義務である。ここではラーオやクメールの独立は考えられない。一方、レームトーン人の旧独立国であるベトナム族の課題は独立回復のため対仏革命闘争である。ベトナム族の対仏闘争とタイ族の対仏闘争は相互支援の共闘関係に立つことでそれぞれ有利に展開することができるのである。

タイの対仏戦争はタイ族の統一国家建設、ベトナムを含むレームトーン人のフランス支配からの解放という理念によって正当化された。これらの目標はレームトーン全域の反仏闘争とタイの軍事行動が連携することで実現可能となるのである。

2、クメール＝タイ族説の根拠

タイ仏印紛争期において、ラーオがタイ族であることを説明した宣伝局の声明や発表は見当たらない。説明の必要がないほど自明なことであると考えられたからであろうか。一方、同じくタイ族とされたクメールについてはしばしばその論拠について説明が試みられた。しかしそれはタイとクメールの間の実際の距離の大きさ故に牽強附会的なものとならざるを得なかった。

文献5ではタイ宣伝局は「タイとクメールは他人ではなく、昔より黄金半島のタイ族(パオ・タイ)である」と言い、クメール語は黄金半島のタイ語方言の一つであるとも言っている。種族や血統を意味するチュア・チャートについては比較的伸縮性があり、普通は異なるチュア・チャートとして扱われるタイとベトナムを、ある場合には同一のチュア・チャートとしたケースもある^{*3}。これに比し、種族を意味するもう一つの言葉、パオもしくはパオ・

パンはより血の濃さを連想させる。クメールはパオ・タイであるという上記の表現は、同一チュア・チャートであるという以上により親近な関係であることを印象づける。

しかし、クメールとタイは血の濃い同族であるとか、クメール語は黄金半島のタイ語方言の一つであるという表現が強引なこじつけであることは当時のタイ政府の政策自体によっても暴露されている。

1940年9月5日にタイ内務省は、『入国管理法の手数料及び手続き免除事例に関する内務省布告』を出し同日より（1）タイ民族（チュア・チャート・タイ）である者、（2）シップソングタイ、フアパンタンハータンホック、ルアンプラバーン、ウィエンチャン、スワンナケート、チャムパーサク、カムプーチャーに住居を有する者に対して、入国管理法の入国税及び手続きを免除した。（『年次法令集 5 3 巻』 pp.374-375）

この布告がラオス、カンボジアの土着民をタイ族とした法令であることは9月18日に宣伝局が「ラオス地区（クウェーン・ラーオ）、クメール地区（クウェーン・カメーン）と称される地区などのメコン河流域のタイ王国と隣接する地域に住むタイ族（チュア・チャート・タイ）でタイ王国に移住したい意思を有する人には入国税を免除し居住証明も受領する必要はないとした内容の外国人登録法（第4号）及び入国管理法の改正を最近布告した。その結果上記の地域からタイ族がタイ領内に既に移住を始めており、これから移住しようと準備している者も少なくない。これはかつてタイの主権下にいたタイ族は依然としてかつての祖国に忠誠心をもち続けていることを示している。」(Khao Khosanakan,1940,p.1668)と発表していることでも明らかである。

ところが同じ頃タイ宣伝局はタイ国内のカンボジアに隣接する県に居住するクメール系の住民に対して、異種族の外国人の言葉であるクメール語の使用を止めタイ人なのであるからタイ語を使用すべきであるという指導を内務省が実施していることを発表している。

即ち、宣伝局は1940年9月25日に

スリン、ブリラム、プラチンブリー県などのタイ人がタイ語ではなく外国人（チョン・ターンダーオ）の言葉を日常的に使用しているので、内務省は現在の国の政策に合致するように早急にタイ語使用に戻るような措置を採ることは各県当局の義務と見なす。内務省の各県当局への説明では外国人の言語を日常的に使用している地方のタイ人はそれを好んでとか、その種族になりたいとかで使用しているのではない。彼らは血縁や地縁関係があるので交流上の便利さから、自分がタイ語を使用しなければならぬタイ人であるということの重要性を考へることなく使用しているのである。タイ政府はこの問題の重要性に鑑みてラッタニヨム9号を布告しタイ人（チョン・チャート・タイ）はタイ語を話しタイ語を使用しなければならぬことを原則としたのである。」(Khao Khosanakan,1940,p.1600)

と発表している。

タイと同一種族であるからクメール人をフランス支配から解放しタイに復帰させなければならないという理念と、クメール的要素を外国のもの＝非タイ的なものとして排除し同一種族であるはずのクメール人にタイ語使用などタイ化を強制しなければならない現実と

の間には大きな矛盾が存在する。この矛盾点は仏印側の放送によっても追及されたが、これに対するタイ側の答えとして最も体系的なものは、失地回復のイデオログであるルアン・ウィットワータカーン無任所大臣が11月21日に行った「タイとクメールの種族関係に付いてサイゴン放送に答える」と題したラジオ演説である。(文献6)

その中で彼は「クメールとタイは違うとしてサイゴン放送が挙げる根拠は唯一タイ語とクメール語は異なるということである。しかし、言語の違いだけで種族が異なると言うのなら、フランス自身も4-5県はドイツやイタリアに渡さなければなるまい」と述べ、フランス人学者の説を引用して「**Felicien Challaye**は同一種族は次の共通点を有すると述べている。即ち、1、顔と頭骨の形、2、皮膚の色と体型、3、疾病、4、食べ物、5、音楽、6、伝説と信仰、7、家屋と家具、8、模様と色、9、記念品、10、性質。タイとクメールはこれら10項目のどれに違いがあろうか。」と反論している。

文献7に見るように、ルアン・ウィットワータカーンは遅くとも1937年からはクメールはタイ族であるという理論を提唱している。彼がタイ政府がタイ仏印紛争期間中一貫して採ったクメール=タイ族説の創始者であった。

II タイの対インドシナ工作と成果

1、インドシナからの移民奨励

40年9月5日に、前述の「入国管理法の手数料及び手続き免除事例に関する内務省布告」が施行された。これはタイ政府が対インドシナ新政策を開始したことを示す証拠である。この布告の意図はラオス、カンボジアからタイへの移民者を増大させようということにあった。

布告の成果を9月19日に、宣伝局はラオス、クメール地区と称されるメコン河流域のタイ王国と隣接する地域に住むタイ族(チュア・チャート・タイ)が多数タイ国境県に移動して来て入植している。タイ政府はこれらの祖国に忠誠なタイ族の人々はその多くが生活物資を欠いているので内務省に至急支援させることにした。彼らが祖国で確固として基礎を打ち立てられることができるように内務省はインドシナ国境県の知事に種籾、食料米、その他の種子、農機具を支給し、住居でも便宜を図るように至急命令を出した。」(Khao Khosanakan,1940,p.1669)

と発表している。この発表から、インドシナからの移住者の多くは対仏闘争意識に燃えた政治意識の高い知識層ではなく、農民であったことが推測される。仏印紛争期間を通して宣伝局はしばしばインドシナからの移民者のタイ入りを発表しているが、それらの多くは数家族から数十人の単位で国境を越えてきた農民であった。^{*4} 政府は11月半ばには移民の当面の生活を助けるとともに入植地(ニコム)などの世話をするインドシナ避難民援助検討委員会を設置した。

1940年12月29日にはタイ国放送は声明第19号として要旨次のような発表をし

た。即ち、

インドシナからの移民者には生活できる土地を与えるほかに、次のような資金を与える。

(イ)、タイ国籍者の民間人、2-5人家族は20-50バーツ、5人を超える家族60バーツ以内、独身者10バーツ以内。(村嶋注、12月20日の内相通達でラオス、カムプーチャー地区の土着民はタイ国籍者とした)、(ロ)、タイ族(チュア・チャート・タイ)ではない民間人、たとえばベトナム人などは、(イ)の半分以上、なお移民してきたベトナム人の多くはタイ国内に親族友人がいるので彼らにも世話をさせる。(ハ)、フランス軍に所属する軍人・警察は兵、下士官の階級に応じて10~50バーツ、(ニ)、フランスの文官についても(ハ)と同様。インドシナの同胞が我々の援助の仕方を知ったならば、同じ皮膚だからタイのみがレームトーン同胞を助けることができること、生活も血肉も我々と違うフランスに頼ろうとしても無駄であることを伝えて欲しい。インドシナの総予算の三分の一はフランス人官吏の月給に使われている。土着の人間が上手にできる職務に数千人のフランス人を使っている。フランスがいる限り、我々は痩せ細るだけである。故に我々は共通の敵追放を今からやろうではないか。(Khao Khosanakan,1941,pp.38-42)

この発表からタイ政府はタイ族であり自動的にタイ国籍を与えたラーオ、クメール人だけでなく、ベトナム人も移民として歓迎したことが判る。またフランス軍に所属する下士官、兵士について特に言及しているのはフランス軍中のベトナム、クメール、ラーオ兵を獲得することでフランス軍の戦力低下と戦意喪失を期待したものであろう。この期待はルアン・ウィットワータカーンが40年12月15日のラジオ演説『タイ民族は勝利する』(文献8)で「フランスは既に土民兵であるベトナム、クメール、メコン左岸のタイ人兵を信頼できなくなっている。フランスは武器をこれらの兵士に与えることは出来ない。」と語っていることなどに明白に示されている。

1941年2月17日に宣伝局が発表した、2月15日までのメコン左岸、チャムパーサック、カムプーチャーから、即ちインドシナ全域からの移民総計は1万8541人である。その内訳は、メコン左岸からチェンラーイ県へ1,295 ナーン県へ1,117 ウトラディット県へ172 ルーイ県へ1,955 ノーンカーイ県へ1,490 ナコンパノム県へ632(合計6,661人)。チャムパーサック、カムプーチャーからウボン県へ1,397 シーサケット県へ369 スリン県へ283 ブリラム県へ352 プラチンブリー県へ5,941 チャンタブリー県へ1,653 トラート県へ1,885(合計11,880人)である。(Khao Khosanakan,1941,pp.426-427) *5

インドシナからの移民、亡命者の中には後述するように対仏闘争の闘士や革命家なども含まれ、彼らは宣伝や国境工作においてタイ政府に協力したが、このような知識層は限られており、多くは前述のように政治意識は高いとは思われず、対仏戦に即戦力として利用可能とも考えられないインドシナの農民であった。彼らを大量に受け入れることにタイ政府はどのようなメリットを見出していたのであろうか。

当時は人口を国力を示す最重要指標と考える人口数重視の伝統的価値観が依然継続していた。フランスに対する「領土」喪失は同時に「人口」喪失を意味し、タイ当局者は人口回

復を望んでいた。彼らは紛争以前から仏印側に住む住民をタイ側に移動させる方法を検討している。たとえば1937年5月8日にピブーン国防相がタムロン内務相宛に次の内容の意見具申書を提出している。即ち、

過去2-3年来インドシナの人民で、酷税と抑圧を逃れるためタイ国内に移動してきた者の数は大きなものがあった。これは彼らがタイの立憲体制とタイ官吏の行政的有能さを信奉していることを示すものであり、特別の人口増という利益をもたらした。ところが最近仏印政府は国境地帯に居住する者に対して3年間人頭税を免除し、かつ微罪は罪に問わないという新方針を布告してタイ領に移動してきた者を連れ戻そうとしているという。これは我が国の特別の人口増を阻害するのみならず、従来からタイ領に住む住民がタイの人頭税を嫌ってインドシナに逃げ込み、我が方の利益に打撃を与えることになる。我が国も仏印と同様に人頭税免税措置などを採ることは如何であろうか。(NAT、So.Ro.0201.37.6/11)

またルアン・ウィチットワータカーン大臣は40年10月17日に軍人に対する講演で現在のタイ領土にも未開拓の土地が沢山あるではないか、それに失地は鉱物資源などが特に豊かというわけでもない、どうしてそんな失地を取り返す必要があるのかと私は質問されたことがある。その答は次の通りである。(1)我々が失地を回復しようとするのは賊が財産を奪おうとするのでも、人を奴隷にしようとするものでも、他民族の資源を自己の利益のために掘り出そうとするものでもない。民族の名誉を考えるからである。名誉を重んずる民族は同一民族が他民族の強制抑圧下にあることは座視しえない。我々はタイ(自由)である。我々の兄弟もタイ(自由)でなければならない。領土で重要な問題は民族問題なのである。我々が失った土地は植民地でも、他民族のものでもない。我々と宗教と文化をともにするタイの血とタイの胤のものである。故に取り戻さなければならない。(2)フランスが暴力で領土と富とを強奪したことは正しいといつまでも容認することはできない。」

と民族統一国家の建設を語り、同時に

ピブーン首相はこれまで何回も今後我々は大国にならねばならない、そうでなければ亡国あるのみと語っている。首相がこのように発言する理由は世界情勢にこれまでにない大変動が生じ小国は大国に吸収されると考えるからである。ロシア近隣の小国はほとんどソビエト連邦に吸収されて消滅した。今回の戦争が終了した暁には世界地図は目新しいものとなっている。小国は一掃され残るは大国のみであることは間違いない。故に我々の選択肢は自ら大国となるか、どこかの大国に吸収され消滅してしまうかの何れしかない。もし失地を回復できるなら大国になることが期待できる。というのはもし失地全てを回復できれば国土面積が倍になり人口が400万人増加する外にシップソンジュタイの北にある広大なタイの地に達することができるからだ。そこには我々タイの血を保ち自らタイ人と称しタイ語を話しタイの心をもつ2400万人の人々(壮族のこと一村嶋)がいる。我々はこの2400万人の人が我々を訪ねてくる扉を開くことになるのだ。これはこの地を侵略するという意味ではない。我々は侵略を欲しない。我々の土地は余るほどにある。我々はタイの兄弟が入ってきてともに幸せを享受することを願うのみなのだ。このことは必ず成就すると確信

している。遠くない内に我々は約90万平方キロの国土と4000万以上の人口をもつ大国となる。もし我々がそうせず、小国のままに甘んじていると大国に吸収されてしまうのである。大国か吸収かどちらを選ぶかである。・・・

と語り、中国領のタイ族（チュアン族）をタイ領に移住させる方法により人口増を図り、4000万人の大国家を建設する希望を述べている。

以上よりインドシナからの移住者の質は問わず、また対仏闘争において直接有益であるか否かを問わず、人口増それ自体にも当時のタイ政府は大きな価値を見出していたことが判るのである。

2、対ラオス共闘工作

ピブーン首相が失地回復を断固実現すると決意したのは40年9月末のことと考えられる。9月26日に宣伝局は「政府は本件（失地回復のこと一村嶋）を後退することなく最後までやり遂げるといふ断固たる決意をしていることを国民に強調したい。そして本件は成功するという希望をもっている。問題はそれが早いか遅いかだけである。」と発表した。その2日後、ピブーンの対日連絡担当者であるワニット商務局長が鳥越海軍武官を訪問してピブーンは決意したことを伝え日本の協力を求めた。

鳥越大佐は日本の大本営陸軍部で「9月28日ワニット来る ピブンは決心せり（三国同盟の影響 27/9）10月1日鳥越とピブン会見す ワニットの言は予の真意なり 要すれば内閣の改造もする・・・」（防衛庁防衛研究所図書館『井本日記』）と報告している。この報告からはピブーンが9月27日の三国同盟の成立を見て対日依存による失地回復を決意したように読めるが、上記の宣伝局声明その他から見て、9月27日の三国同盟成立がピブーンの断固たる決意の契機となったことも、ピブーンが対日依存を決意したことも、ともに疑問である。しかし彼が対仏交渉という外交的方法で不可能ならば、様々な選択肢を用いて断固として失地回復を実現しようと決意したのはこの頃であったことは間違いない。

（1）ペサラートとの連絡

その一つの表れは対ラオス工作の開始である。

対ラオス工作が開始されたことは、1940年9月24日付けの内務省命令でサワイ・サワイセーンヤーン少佐がラオスのウィエンチャンの対岸にあるノンカーイ県副知事に任命された事実によって知ることができる。彼の副知事発令は10月1日に宣伝局が公表した。（*Khao Khosanakan, 1940, pp.1630-1631*）

サワイ少佐の副知事就任の背景について、サワイと共に人民党陸軍派の有力者、セーリーロンリットの腹心であり、かつボーウォラデートの乱鎮圧でもサワイと生死を共にしたセーン・チュンチャーリット大佐（元国鉄総裁）は次のように回想している。即ち、ナーイ・チャンターがビエンチャンで銃殺された頃のある日（銃殺されたのは9月26日、

村嶋)、セーリーロンリット大佐がセーンに対して、ピブーン首相はラオス国境で特命事項を実行させるためにルアンプラバンもしくはウィエンチャン王家の人物を捜しているが、適当な人が見つからず困っていると語った。セーンはサワイの祖父はルアンプラバン王朝の第5代目の王(チャオ・ウンカム、在位1870-1888)であることを明らかにした。それでサワイはノンカーイの副知事に任じられることになった。サワイがノンカイ知事に就任挨拶に行ったその日に、サワイは数人の官吏とともにメコン河を渡りピブーンから託された極秘の手紙をチャオ・ペットラート(ペサラート)に伝えた。」(出所『サワイ・サワイセーンヤーコン大将葬礼記念本』、1981年、89頁。

ピブーンがサワイを通じて、ルアンプラバン副王家の出身でラオス人行政官の頂点に位置していたペサラート*6との間にどのような交渉を行なったのかは、現在のところ筆者には不明である。なお、フランス保護領としてのラオスでフランスが認めた王族の行政上の地位として次の三者があった。①ルアンプラバン王(ラオス10県の一つルアンプラバン県のみ)に権限あり。王の下に内閣が置かれ立法権も行使する。法令はフランス人コミッサー〔他の県ではレンダンと称する県知事〕の副書を経て施行。王はコミッサーの副書を経て勲章授与権を、ラオス理事長官〔ラオス統治のフランス人の最高官〕の副書を得てラーオ人行政司法官吏の任免権を有する)②チャオ・ラーチャパーキナイ(ウィエンチャン領主とも言うべき名誉的地位)③チャオ・チャムパーサク(領主)。ペサラートはチャオ・ラーチャパーキナイの地位にあると同時にラオス行政監察長官を兼任した。後者は郡長(チャオ・ムアン)などラーオ人行政官の行政やラーオ人司法官の裁判所を監査する権限、ラオス理事長官の承認を得て全ラオスのラーオ人官吏の任免権をもつ。(チャイチャローム・ナーカプラウェート『ナコンチャムパーサクが我が領土であった一時代』1950年、42-43、陸軍教育部『フランスのラオス統治について教育読本』など)

10月に入ると10月8日にチュラーロンコーン大学、タマサート大学の政府の失地回復支持デモを皮切りに、10月いっぱい全国各県、各郡で失地回復支持の官製デモに多数の学生、人民が動員された。11月13日にはピブーン首相が国軍最高司令官に任じられるなど野戦軍組織の第一弾が発表され、本格的戦闘態勢の準備が開始された。11月21日、政府は国会に省局設置法改正案を提出し、内務省内にインドシナ局を新設する法改正を提案した。同局は仏印の行政組織、人民の生活、福祉、政治的権利自由などの実態について調査する任務を有した。同法は11月29日付け官報で公布され同時に内務副大臣チャウエンサクソクラーム少佐のインドシナ局長兼任が発令された。(Khao Khosanakan,1940,pp.2073-2074,and 1941,p.62,807) タイ仏印間に戦端が開かれたのは11月28日である。

(2) ウン・サナニコンとラーオ・イサラ運動の開始

ノンカーイ県副知事としてサワイはタイの呼びかけに呼応してメコン河を渡って亡命してくるラーオ人の青年知識層の世話も担当した。これについてはタイに亡命してきたラ

オスの革命家としては最も大物であるウン・サナニコンの次の回想がある。*7

ウン・サナニコンは40年12月9日にメコン河を泳いで亡命に成功した後、タイの宣伝局で対ラーオ宣伝の任務に就いたが、間もなくパイロット・チャイヤナム局次長らとともにウドン、ノンカーイ、シーチェンマイ（ノンカーイ県の一支部、ウィエンチャンの対岸にある）に映画をもって宣伝に派遣された。シーチェンマイではウィエンチャンの民衆に向けてシーチェンマイまで来て映画を見、ウンの話を聴くように呼びかけた。メコン河を渡ってくる者こそいなかったが、ウィエンチャン側のメコン岸辺で何十人もウンの演説を聴くのが見えた。ノンカーイではウンの呼びかけで逃げてきた50人余りに会った。この中には後にラオスのリーダーとなったエリートが多い、例えばウンの従兄弟のウドン・サナニコン（ラオス軍参謀長）、ブアチャン・インウォン（代議士）などである。彼らはウンとサワイが相談してサワイの出身母体である国鉄とか、ウンがいる宣伝局とかに職場を与えられた。ウドンはチュラーロンコーン大学で新聞学を学び、マハーシラー・ウィラウォン*8はタイ国立図書館でラオス史を研究した。（ウン・サナニコン『回想録』（タイ語版）1977年、64-65頁）

上記の引用例に見るようにタイ側に移民もしくは亡命して来たラーオ人には農民や下級兵士だけではなく、政治意識の高いエリート層も少数ながら含まれていた。

ウィエンチャンの名門出身であるウン・サナニコンの経歴を『回想録』より見てみよう。彼はハノイ大学で獣医学を学び1933年に卒業し、獣医として仏印総督府の官吏に採用された。最初の勤務地、チャムパーサクで仏人上司の無意味な命令を直ちに実行しなかったために喧嘩となった。喧嘩の原因について本人に弁明の機会を全く与えられないまま、1933年末に僻地サムヌアへ左遷命令。彼は仏人の不当な扱いに怒った。1940年に日本の仏印進駐とタイ仏印紛争が生じた頃、サムヌアのウンを含むラーオ人官吏4人が協議し、フランスはインドシナの統治権を失うことは間違いなく、タイは領土を獲得するに違いない、今後アジアでは日本が力を持つという結論に達した。4人の会議は、ラオスはタイから逃れることはできないし、協力する相手としてはベトナムよりタイの方がよい、タイ軍がラオスに進攻した場合にラーオ人に酷い扱いしないようにタイ国放送の呼びかけに応じて今のうちからウンをタイに派遣しておこうと決定した。（同書、29、86ページ）決定に従い、ウンはハノイに出て、ここでナコンパノム出身でハノイに留学中の女学生からピブーンの腹心チャイ・プラティバセーン宛の紹介状を貰ったのち、1940年12月9日の昼間ターケクからメコンを泳いでタイに渡った。彼はタイの宣伝局に勤務し、カナ・ラーオ・イサラを組織した（81頁）。1945年10月にラーオ・イサラ臨時政府の経済相兼国軍最高司令官に就任（183頁）、その後国会議長など歴任した。ラオスの共産化ののちタイからフランスに亡命一ヶ月後の1976年、70歳で死亡した。

これまでは国境をはさんで銃砲撃を繰り返していたタイ陸軍がインドシナ領土に進攻を開始したのは41年1月5日のことである。タイ宣伝局は戦況発表のなかで「1941年1月5日6時インドシナ兵がアランヤプラテートのタイ側を猛攻し、タイ軍はこれを押し返

し、インドシナ軍の今後の侵攻を防止するためインドシナ領土内のいくつかの村（タムボン）を占領した。」（Khao Khosanakan,1941,p.121）と自己防衛を理由としながらもインドシナ領にタイ軍が進出したことを認めた。

陸上戦が開始された直後の1月8日にウン・サナニコンはタイ国放送より、ラーオ人向けにラーオ語放送を行い、間もなく始まるタイ軍のインドシナ進攻に協力せよと呼びかけた。ウンの放送要旨は次の通りである。

タイでは大歓迎を受け、政府高官も兄弟の如く対応してくれる。初めて自由、平等、博愛の真の意味を体感している。インドシナでは抑圧しかなく、人民は数々の重税を課されている。私と同じようにタイに来る同胞をタイ政府は歓迎し、資金、物資を援助し、職も紹介する。来ることができない者はタイ軍が間もなくインドシナに進攻する時にタイ軍を援助できるように備えて欲しい。タイ軍は我々をフランスのくびきから解放するために身を犠牲にするのである。タイの兄弟はこれによって得るものはなくただ犠牲だけである。我々は得る一方である。このようなラオスの歴史上またとない好機を逃すことなく右岸の兄弟と協力して自由を勝ち取ろう。（Khao Khosanakan,1941,pp.287-291）

タイ軍は結局1月28日の停戦までにはメコン河を渡河することはなかったが、メコン右岸（西岸）の仏印領であるチャムパーサク及びルアンプラバン対岸（サイヤブリー）には進攻し占領に成功した。

（3）チャムパーサク王家の協力

タイ陸軍の東北方面軍は1月19日頃よりチャムパーサクに進攻を開始し、21日には首府に無血入城した。この地のラオス人統治者チャオ・ラーチャダナイと息子のチャオ・ブンウアはタイ軍の到着前よりタイ側に積極的に協力したので、1月18日にはフランス軍に逮捕監禁されたという情報もあった。（Khao Khosanakan,1941,p.473）1941年1月17日付けで内務大臣はチャオ・ラーチャダナイに叙勲することを推薦したが、推薦理由には以下のようなタイ仏印紛争時の彼の協力振りが記されている。即ち、「チャオ・ラーチャダナイの行動及び心理を詳細に調査した結果、彼は心もタイ人であり、本心からタイ国に忠誠である。それは彼がタイ仏印紛争時に公式に我方への忠誠を表明し、タイの勝利のため紛争の最初から連絡して援助をしたことに示されている。我方はナコン・チャムパーサクを占領したとき彼を初代の県知事代行に任じた。彼の先祖はウィエンチャンの出身で、一族はウボン県にも拡大したので、その親族はメコン河の両岸に広がり、両岸の人民に尊敬されている。」（N A T(2)So.Ro.0201.46.3/28）

タイ軍の入城をチャムパーサク市民が歓迎した様子を1月23日に国軍最高司令部は「チャムパーサクでタイ軍は道路を埋め尽くすほどの人民の歓喜に迎えられた。占領後東北方面軍はチャムパーサクの地がタイの主権下に戻ったことを宣言しタイ国旗を掲揚した。チャムパーサクの兄弟は今奴隷状態から解放されて自由になったことを自覚し万歳を叫んだ」（Khao Khosanakan,1941,p.474,476）と発表している。*9

チャオ・ラーチャダナイの息子チャオ・ブンウアは2月2日から10日までルアン・ウィットワータカーン大臣の賓客としてバンコクを訪問した。彼のバンコク訪問を宣伝局は2月7日に、「この自発的訪問はタイ国とナコン・チャムパーサックとの間のかつての兄弟のような親密さと愛情が、長らくタイ国の統治から分離を強制されたにも拘わらず、変わることがなかったことを証明している。」(Khao Khosanakan,1941,pp.550-551)と発表した。

2月9日にチャオ・ブンウアはタイ国放送からラジオ演説を行ったが、その要旨は以下の通りである。

外国支配の間もチャムパーサック人は自分たちを正真正銘のタイ人と見なしてきた。その証拠として我が父は、1926年に建てた宮殿にタイ・ノイ文字ではなく、バンコクで使っているタイ文字で「チャオ・ラーチャダナイの館」と刻まさせている。消せという圧力を受けながらもこの文字は今日までそのままに残している。また我がナ・チャムパーサック一族にとってバンコクのタイ語を学習することは必修であり、父も私もルアン・ウィットワータ大臣が驚くほど上手にタイ語を話すことができる。寺院にも商店にもタイ文字で看板を表記したものが多数ある。これらはチャムパーサックの人々が自らをタイ人と見なし、外国の支配を脱してタイの兄弟に加わりたいという強い期待を維持してきたことを示すものである。1月21日にタイ軍がナコン・チャムパーサックを占領した日はチャムパーサックの人々が最も幸福に感じた日である。40年間消えていた歓びが戻ってきた日である。とりわけ僧侶は再び仏教が栄えると歓迎している。

ナコン・チャムパーサックはかつてのタイ時代にはウィエンチャンと覇を競い、栄えた大都市であったが、この40年にナコン・チャムパーサックは昔の面影を留めないほどに零落してしまった。かつては象と馬の厩舎があったに過ぎないパクセが栄えている。私はサイゴンで12年間勉強し、各地を旅行したがバンコクほど繁栄しているところを知らない。単に外見的な立派さだけでなく、人民が幸福で内面的にも栄えているのである。(Khao Khosanakan,1941,pp.551-555)

上記ラジオ演説でチャオ・ブンウアがチャムパーサック王家におけるバンコクの文字、バンコクの言葉の使用を強調しているが、失地回復とはバンコク支配の復活であると認識したためであろうか。

なお、チャオ・ラーチャダナイの対タイ協力については疑問点も存在する。彼のもう1人の息子であるチャオ・ブンウムはタイ軍侵攻時にフランス側に協力して1941年にフランスから勲章を授与された。更にブンウムは1945年3月9日の日本軍により仏印処理の際には日本軍に逮捕されたが、逃亡してフランス軍と連絡した。その功により45年10月にフランスから叙勲された。(NAT(2)So.Ro.0201.86/48.p.138、チャイチャローム・ナーカプラウエート『ナコンチャムパーサックが我が領土であった一時代』1950年、79頁)タイのチャムパーサック統治においてはタイ政府は当時のタイの行政制度をそのままに持ち込み、たとえば学歴のみを重視した公務員人事制度、官吏の自己裁量による処罰をやらず法治主義による裁判、立憲革命後の官僚層と人民間の身分差別的慣行を廃止する傾向

などを持ち込むなどフランスの下でチャムパーサクの官吏層が享受してきた慣行を無視、またチャムパーサク知事には内務官僚を任じ、県庁所在地もチャムパーサクから川下に移すなどチャムパーサクの旧支配層を特に優遇しなかった。そのため官吏層にタイの支配は不人気で、チャムパーサクがフランスに返還された1946年11月にタイ側と行動を共にしたラーオ人官吏は5名に過ぎなかった。仮にタイに残るか、フランスに帰るかの住民投票が実施されても、タイが勝つことができたか否かは疑問であった。(チャイチャローム・ナーカプラウェート『ナコンチャムパーサクが我が領土であった一時代』1950年、102-105頁)

(4) サイヤブリー解放

一方、ルアンプラバン対岸全域をタイ陸軍のパーヤップ師団(ウットラディットに司令部)が占領したのは1月26日のことである。同師団は28日付けの布告「ルアンプラバン右岸の統治について」によって、この地を4地域に分け、即ち、チェンラーイ、ナーン、ウットラディット、ルーイの4県の担当地域に分割して統治することを発表した。(Khao Khosanakan,1941,pp.310-312、482-483)

2月3日にはナーン県知事はプラクルー・カムピーラパンヤー僧とともにナーン県が行政担当となったルアンプラバン地区ホンサー郡 **Muang Gen** に到着した。同所ではタイ軍に同行して来た郡長が村長ら19人を伴って出迎えた。ここでプラクルー・カムピーラパンヤー僧は僧侶を集めて訓示した。同夜ラジオを設置してバンコクからの放送を村民に聴かせた。集まった者は500人であった。

翌朝ワット・ルアンでタムブンしたのちプラクルー・カムピーラパンヤー僧が集まった300人に説教した。この機会にナーン県知事は次のような説明を行った。(イ)、タイの政治を説明して自由、平等、博愛の原則を説き、(ロ)、家庭菜園、動物を飼育すべきことを助言し、(ハ)、失地回復の理由を説明して、奴隷から脱して完全に自由(タイ)になったこと、全員が国家の主人でありこの権利を再び奪われないように命を犠牲にしても防衛すべきこと、(ニ)、森に避難している者も村に戻って通常の生活を始めるべきこと、(ホ)、病人へ医薬品を配布、(ヘ)、現在政府は一切の徴税を中止しており、政府の命令を待つこと、(ト)、今後はタイの法律によるべきこと、(チ)、困り事のある者はこれから任じられるタイの官吏に援助を求めるべきこと、(リ)、軍警察の進攻に輸送手段を提供して援助した村民への感謝。

(Khao Khosanakan,1941,pp.560-561)

ナーン県知事が村民に対して行った訓辞の内容は立憲革命の理念、当時のピブーン首相の諸政策などであるが、彼が仏僧を伴って占領地に入ったことは仏教が回復地人民の民心把握に、立憲革命の理念と共に重要な役割を有するという認識があったためであろう。他の3県知事もナーン県知事と同様に担当占領地域に入り、それぞれ宣撫工作を実施している。

*10

3、対クメール工作

タイ宣伝局に属するタイ国放送がクメール語放送を11月5日に開始したことは前述した。(文献5参照)

対タイ協力をしたクメール人指導者として具体的人名が判るのは今のところ、プラ・ピセートパーニット (Pok Khun?) のみである。彼が所属した宣伝局のウィラート局長が内閣書記官長宛に彼の叙勲を申請した1941年4月21日付けの文書によれば、プラ・ピセートパーニット (Pok Khun?) はタイ仏印紛争が激化する前、40年11月頃から無報酬で宣伝局で職員同様に働いたクメール人である。宣伝局長の眼から見れば、彼の貢献は、カナ・カメーン・イサラ (クメール・イサラ、自由クメール) を組織することを発案してタイの公務を助けたこと、クメール語放送を手伝ったこと、タイ空軍の空爆の便宜のためにクメールのいくつかの都市の地図を作成したこと、戦闘が続いている最中に東部方面に二回出かけて移民してきたクメール人と接触したことである。彼はクメールの上級貴族家系の出身で、フランスに割譲される以前のバタンバンを統治したチャオプラヤー・アパイプーベートの娘婿である。プラ・ピセートパーニット (Pok Khun?) の実父のオークヤー・マハーモントリ (Pok Dut?) はカンボジア国王の侍従長であった。実兄のオークヤー・ウドムモントリ (Pok Hel) は最高裁判所長の現職にあり、フランスはこの実兄にサイゴン放送で弟のタイ国放送からの発言に反論させたことがある。(NAT(2)So.Ro.0201.46.3/38)

プラ・ピセートパーニットの担った役割はラーオ人のウン・サナニコムと同様なものであった。彼が組織化を発案したクメール・イサラは1940年12月22日の14時から16時にバンコクの人民党倶楽部で大会を開いた。大会にはクメール人の僧侶や人民など3000人が参加した。

この大会でプラ・ピセートパーニットは演説を行い、次のようにフランスを糾弾し、かつピブーン首相に感謝した。

フランスはナロードム王に強制的してカンボジアを保護国とした。クメール人には高い地位は与えられず、少尉に任官した者でさえも極めて少ない。クメールの役所はフランス人とベトナム人で溢れている。フランス支配継続のために十分な教育も与えず、誤った歴史を教え込んでいる。フランスはクメール人から税金を収奪するばかりである。第一次大戦の時にはクメール人を多数徴用したにも拘わらず何ら見返りを与えず、却て抑圧と増税を強めた。「かつてのような自由を得るためにフランス権力を取り除こう。人道に則った政策を採り、かつ国王を元首としているタイ政府の支援を得て、それを実現しよう。指導者(プーナム)であり慈悲に富む首相、ピブーン少将は我々クメール同胞がここに集会する権利と機会を与え、我々がクメール・イサラを組織する権利を与え、我々を全面的に支援している・・・」(Khao Khosanakan,1941,pp.174-181)

4、対ベトナム工作

タイ側は40年11月16日にベトナム語放送を開始し、またタイ語放送でもこの頃からベトナム人の対仏闘争に対するタイ側の強い期待をしばしば表明した。この時期はタイ側が失地回復のためには武力行使不可避であると臨戦態勢に入った時期である。このようなタイ側の事情がベトナム人の反仏闘争への期待を生じさせ、更に同時期に南ベトナムでカオダイ教の反乱が生じたことがタイの期待を一層強化したと考えられる。しかし、タイの対ベトナム工作の布陣は9月末から開始されていた。

(1) バンチョン駐サイゴン領事

タイ閣議はバンチョン・チープペンソック(Banchog Cheeppensook)警察中佐を駐サイゴンのタイ領事として派遣することを、40年9月27日に決定した。(NAT(2)So.Ro.0201.86/47)彼の階級は表面上海軍大尉に変更された。バンチョンの任務は領事の仮面を被って軍事情報の収集と謀略工作を実施することであったことは後述する資料から間違いない。バンチョン領事のサイゴン派遣によってタイの対ベトナム工作は開始されたと見ることができる。これは前述のようにサワイを対ラオス工作のためノンカーイ副知事に任じた時期と同時期である。

バンチョンは人民党員ではなかったが32年の立憲革命に海軍中尉として参加した経歴をもち、サイゴン領事発令まではカンボジア国境のアランヤプラテートの郡長の任にあり、郡長時代からカンボジアの道路、橋梁、軍隊配置など兵要地誌を調査してピブーン首相に直接報告していた。(NAT(2)So.Ro.0201.86/48.p.12)

彼がサイゴンに着任したのは10月10日であるが、しかし在任50日にして「仏印が我が領事の特権を尊重せず、領事を拘束して家宅捜査を行い、最後には駐タイ仏公使が領事はスパイ容疑で逮捕される可能性がある」とタイ外務省に説明したので、国外に出国せざるを得なくなった。」(Khao Khosanakan,1941,pp.323-325)彼は41年1月7日までにはバンコクに帰任した。*11

着任直後、彼は電報でサイゴンまでの陸路途中で見た仏印軍の配置を報告した。これ以降彼は電報でサイゴン港の軍艦、サイゴンを通過する軍隊の規模や人種、カンボジアやラオスの軍隊の移動など軍事情報を連日のように詳細に報告している。

11月5日の電報では「11月3日にプノンペンで一万人のデモがあった。*12フランスがカンボジア王にフランスに忠誠を示してタイの要求に抗議することを求めたからであると一般に信じられている。私見では人口の四分之三は我方寄りと思う。現在私は警察に疑われ、そのうえに総督から領事として承認されていない。当面、行動は極めて慎重にしなければならない。・・・コーチシナの情勢は平静で、政府の厳重な報道規制のため人民は何も知らないようである。」(NAT(2)So.Ro.0201.86/46)と報告した。彼が警察に疑われた理由は明記されていないが、10月31日の電報でバンチョンは「カンボジアは戦時のような灯火管制下にある。コーチシナのフランス人知事は平静を乱すニュースの流布はあらゆる手段

を尽くして除去せよと命令されていると本官に語った。私見では、この命令は我方が必要なニュースを広めることへの警戒から出たものであると考える。」(NAT(2)So.Ro.0201.86/46)と報告しており、バンチョンが謀略的な噂を流布させているとフランス側は疑ったのかもしれない。

小さな事件はあるにせよコーチシナは基本的に平穏であると報告して来たバンチョンであるが、11月23日の電報で「昨夜コーチシナでフランス民兵と人民の激しい衝突が生じ、死傷者は100人とのこと。調査ののち報告する。今朝フエからサイゴンに機関銃約40丁、小装甲車17台、1対空砲をもったフランス・安南兵の歩兵部隊500人が送られてきた。現在町の中は軍がパトロール中である。」とコーチシナに異変が生じたことを報告し、更に25日の電報では、「23日の往電に関して、22日の夜インドシナ人がショロンの民兵ポストを同時に何か所も襲撃し銃を奪おうとした。フランス人1人と民兵10人が死亡し、襲撃側にも多数の死者を出した。この反乱は日本の影響力によって生じたとの噂がある。反乱は鎮圧された。」(NAT(2)So.Ro.0201.86/46)と報告した。

11月23、25日のバンチョン電を読んだピブーン首相は26日にニュースにせよと命じている。しかし、命じられるまでもなく宣伝局は11月25日に「現在全インドシナに混乱が生じ、フランスはインドシナ統治を継続することに絶望しいつでも逃げ出せるように準備をしている。・・・」(Khao Khosanakan,1940,p.2180)と発表していた。

11月27日のバンチョン電報は「インドシナ陸軍司令官はサイゴンに、コーチシナ軍司令官はカンボジアに滞在している。コーチシナ、カンボジア、ラオスは完全に軍当局の統制下にあり、サイゴンでは夜10時以後は外出禁止、近県では6時以降外出禁止。カンボジアではタイからの放送を聴くことを禁止。」と報告した。28日にこの電報を読んだピブーン首相は「領事に詳しい革命情報を常に報告せよ」と命じた。この命により外務省はバンチョン宛に「27日付け貴電受領。土着民の騒乱のその後の展開は我々にとって極めて重要なので、事件発生の際に詳細に報告せよ」という訓電案作成した。しかし29日にバンチョン領事に帰国命令が出され訓電は発電されることはなかった。(タイ外務省文書課文書、NC.3:6/11)バンチョンも27日電を最後に仏印当局から電報発信を拒否された。

(2) カオダイ教徒の反乱とドアン・ワン・ヤオ

前述の電文の往復から、タイ指導者がコーチシナの「革命」勃発に色めき立ったことは判るが、往復電文からはベトナムの「革命」にタイ側が何らかの働きかけをしたのかどうかは判らない。この点に関して1940年12月28日に参本第八課長の臼井大佐が田中新一作戦部長に「西貢独立運動 高大教が主 泰は少し便乗 サイゴン付近に対する謀略工作 (第五列) 東京方面もあり 潜行的にやる」(防衛庁防衛研究所図書館『田中新一中将業務日誌』)等々と報告している。しかしこの記述でもサイゴン付近に対する謀略工作の主語が泰なのか否かは明白ではない。

タイの失地回復闘争とベトナムの独立運動との連携のためにタイが謀略工作を実施した

ことを示す史料として前述のクメール人指導者、プラ・ピセートパーニットが1942年1月9日付けで所属長であるパイロット・チャイヤナム宣伝局長に提出した報告書が重要である。その内容は、

(1942年)11月5日に特高警察の通訳チャンティイーが来て、ドアン・ワン・ヤオがインドシナ独立回復党(カナ・クーイサラパープ・インドーチーン)を組織したいので私に会いたがっていると伝えた。7日にドアンに会った。ドアンの経歴については宣伝局長もよく御存知だが、彼はタイから帰ったのちプノンペンに弁護士事務所を開きカオダイ教団体の顧問であった。カンボジアでも在タイ時代から結びつきがある政治に意を用いた。それで駐サイゴンのタイ領事、バンチョン・チープペンスックと常時連絡を取り、タイ国と仏印が戦闘したときはドアンとその仲間はコーチシナで全力を尽くして騒乱を起こした。しかし極めて惜しいことにはタイ軍は少し戦ったかと思うと、戦いをやめ停戦協議に入った。それでフランス側は反乱者に猛弾圧を加えて逮捕、銃殺し、加担した村民の住む村を爆破するなどして反乱者を一掃した。ドアンも逮捕され終身刑に処されたが、看守の協力を得て脱獄し日本軍に援助を求めた。日本軍は(42年)7月にドアンをバンコクに送った。そこから日本軍はマラヤ地区にカナ・ユアン・イサラ(自由ベトナム)を組織させるために彼を昭南に派遣した。ドアンはその任を完了したので、バンコクにも同様の団体を組織し、しかもそれをインド独立連盟と同様な全アジアの本部とするために戻ってきたのである。ドアンはこれが成功するか否かはタイ政府が反対しないかどうかにか懸かっていると言う。彼はバンコクの前中華総商會に事務所を置く日本軍のアジア人解放独立宣伝班に属している。インドシナ独立回復党の組織化のため、彼がタイ政府に求めていることは(1)設立を許可すること、(2)活動資金の貸与、対仏勝利の時に返済する、(3)インドシナその他にいる同士を集めて軍隊を作るための武器援助、である。現在インドシナは日本軍の掌中にあるのでタイ国に頼らずに日本軍か日本政府に全面的支援を求めることはできないのかと質問したところ、ドアンは日本はフランスのインドシナにおける主権維持を保証しているのでできまい、しかしインドシナ人民が自ら立ち上がり、全土に反乱が広がれば日本もその際には全面的に支援するであろうと答えた。インドシナ独立回復党が成功した暁にはインドシナを連邦国家にする考えであるという。(NAT、So.Ro.0201.37.6/19)

この資料はベトナム人革命家でタイ当局とも関係があったドアン・ワン・ヤオがタイ仏印紛争時にバンチョン駐サイゴン領事らと連絡を取りながらカオダイ教徒の蜂起に努めたことを明白に語っている。ドアン・ワン・ヤオ(タイ語表記ではDuan Wan Yao)については、現在のところ、この文献以上のことは判らない。*13

(3) ベトナム人部隊の結成

12月7日のタイ軍の声明がベトナム人の闘争は反乱ではなく革命であると讃えたことは前述した。12月12日にバンコク放送(タイ国放送という名称は12月16日から正式使用、それ以前はバンコク放送)は「南ベトナムの騒動は民族独立回復運動グループの愛国

心の発露であり、サイゴン放送が非難したような共産主義者や反逆者ではない。愛国と民族独立はレームトーンを向上させる」と声明した。翌12月13日には国軍最高司令部報道部長は「インドシナの無秩序」と題して「インドシナは食糧が不足し、人民は混乱と苦しみのなかにある。インドシナのある部分は独立回復運動がフランスの勢力を破壊している。フランスはインドシナ支配を継続できるとは期待しなくなっている。・・・」(Khao Khosanakan,1940,p.2207)と発表した。

12月15日には、バンコク放送はサイゴン放送に反論する次の声明を出した。サイゴン放送のアナウンサー、ナンマンガス(灯油の意味、タイの放送に反発して直ぐメラメラと燃え出すのでタイ側が付けたニックネーム)はタイが本当に強いのならどうして宣戦布告をしないのかと挑発した。これは力のないものの強がり過ぎない。現在インドシナ全土は騒乱で無秩序状態であり、独立回復運動が全土に拡大し、仏軍も分裂し、国外に逃亡したものも多数いる。土民兵はフランスの代わりに戦おうという気持はない。フランス人官吏の多くは家族と財産を安全なところに避難させている。交通網の多くは寸断され、食糧不足と略奪が全土に広がっている。ナンマンガスはこのような実態を語らず戦争布告しろなどとよくも強がりと言えたものだ。タイ人は平和を愛する戦士であるが、もし強制されれば恰も一人の人間の如く団結して戦う。タイ人は民族の戦争のために、レームトーンに生まれた者としてレームトーンのために血を流すことは惜しくない。我々の軍事力、気力、団結力、経済力はインドシナのフランスより強固で耐久力がある。更にインドシナの同胞の気持ちは我々を支援している。我々の力量は全ての面でフランスに優っている。宣戦布告をするかどうかは我々が決めることである。死にそうな者に宣戦布告することは名誉とはならない。インドシナで彼らが積み重ねた悪業が自らを殺す武器となって跳ね返って来ている。我々はフランスが領土提案をもって来るなら今でも平和的交渉に応じる。(Khao Khosanakan,1940,pp.2149-2151)

12月16日には、タイ国放送局声明第6号として下記を放送した。サイゴン放送は、インドシナは12月12日に3トンの爆弾をタイに投下したと発表した。この投下は夜間に武器なき人民の生命財産も考慮せず実施したもので文明国の規則に反する匪賊の行いである。このような賊のやり方をインドシナの独立運動に対しても採っており、このことは我々にインドシナのフランスには必ず最期の時が来ることを確信させる。フランスは3-4ヶ月分の消費物資しか持っていない。フランスが不正な帝国主義的権力を無理にでも保持しようとするなら、公正を重んじる我々レームトーン人は不正義(アタム)に急ぎ勝利しなければならない。(Khao Khosanakan,1941,pp.14-15)

12月21日にはタイ国放送声明第13号は、ドクー総督の12月20日のサイゴン放送での発言に関して次のように述べている。

ドクーは現在のインドシナの騒乱は共産党の仕業であり、徹底して弾圧すると言ったが、インドシナではベトナム人の独立運動グループにより騒乱はこれまで何度も生じている。今回の騒乱は全インドシナに波及し、ラオス・カムプーチャー地区のタイ人同胞も賛成して参

加している。騒乱は独立回復を原因としており、ドクーが騒乱を徹底して弾圧すると言うことは独立を認めないと言うことである。ドクーが独立運動グループは共産主義者だと非難しているが、それはフランスの常套手段である。彼らは民族解放家(コン・クー・チャート)であり独立と自由を求める全世界の人々から賞賛され支援されるべきである。独立を求めることは正義であり、それを阻止することは不正義である。(Khao Khosanakan,1941,pp.28-30)

また、12月28日のタイ国放送声明第18号では前述した12月20日の内務省の布告を紹介して「現在タイ国はベトナム人兄弟を独立した民族として扱っている。我々は今後彼らをフランス籍とかフランス裁判権に属するとか言わず、ベトナム民族、ベトナム国籍、ベトナム裁判権に属すると称する」(Khao Khosanakan,1941,pp.35-37)と発表している。

以上の引用に見るように、タイ仏印紛争が軍事衝突にまで発展した40年12月においてタイ政府はベトナム人に向けてレームトーン人シンボルの下に対仏共闘を熱心に呼びかけた。タイはベトナム人の反仏独立革命を声を大にして声援し、革命の拡大にタイの失地回復実現の期待を託したのである。

41年1月に入り、タイ・仏印軍間で地上戦が始まるとタイ政府はベトナム人の軍事部隊の組織化を発表した。1月5日、タイ国放送は声明第23号として次のように発表した。フランスの残虐には我慢ならないので独立を回復したい、インドシナ人の軍隊設立にタイ国は援助して欲しいというベトナム人からの手紙を多数受け取っている。タイ当局は既にインドシナ部隊を設立している。インドシナ人は至急国境警備隊に連絡して志願して欲しい。既に多数のインドシナ同胞が応募している。ベトナムの解放独立を求めるベトナム人は応募して欲しい。(Khao Khosanakan,1941,p.52)

更に1月14日のタイ国放送声明第31号では、ベトナム(ユアン)人、クメール人および左岸のタイ人同胞、現在タイ国内にインドシナ独立軍(ゴーン・ターハーン・インドーチーン・イッサラパーブ)組織が完成した。当初は砲兵一大隊であるが、解放のためタイ軍と協力して戦線に出陣の準備中である。インドシナの兄弟よ、我々は同士討ちをすべきでない。フランス援助をやめ、民族解放のためインドシナ独立軍に参加しよう。(Khao Khosanakan,1941,pp.322-323)

と、インドシナ独立軍の成立を発表した。この軍隊についてはこれ以上の詳細は不明である。単なる宣伝用で実体に乏しい存在であった可能性は高いが*14、タイのインドシナ解放闘争との連携政策は遂に軍事組織の設立にまで至ったことは注目してよい。しかし、一月末に日本の調停を受け入れるとタイのインドシナ解放闘争との共闘の意欲は急速に消滅した。

文献1

1940年12月20日付け内務省布告。

外国人登録法の規定により（１）現在タイ国内に永住しているか移民してきたフランス籍のタイ族（チュア・チャート・タイ）、もしくは今後シップソンジュタイ、フアパンタンハータンホック、ルアンプラバン、ウィエンチャン、ターケーク、サワンナケート、チャンパーサック、カムプーチャーから移民してくるフランス籍のタイ族には外国人登録法は適用しない。（２）１９４１年中を通して、タイに永住しているか移民してきたフランス籍のベトナム族、もしくは今後移民してくるフランス籍のベトナム族は登録手数料を免除する。
(Khao Khosanakan,1941,pp.67-68)

文献 2

1940年12月20日付け内務大臣から各県への通達 444/2483 号。

（１）インドシナ各地のタイ族に付いては外国人登録法を適用する必要はないとの内務省布告に関して。一般に知られているようにシップソンジュタイ、フアパンタンハータンホック、ルアンプラバン、ウィエンチャン、ターケーク、サワンナケート、チャンパーサック、カムプーチャーは数百年に亘ってタイ王国の一部でありタイ国王の統治下にあった。しかし最近になってフランスが武力によってタイ国から奪った。それにもかかわらずこれらの地域（クウェーン）の住民の血肉はタイ族であり、タイ国内の兄弟と同様に自由を愛する心を持ち、絶えることなく常に交流を続けてきた。内務省はこれらの地域の住民は、タイ国内にいとインドシナにいとを問わず今後、タイ族（チュア・チャート・タイ）であり、完全なるタイ国籍者であり、タイ裁判権の管轄下にあるものとする。（２）外国人登録料減免に関して。ベトナム人はタイ族と同様に黄金半島（レームトーン）人という血統（チュア・チャート）を有し、古くからのレームトーンの独立国であったが道義なきフランスの植民地にされてしまった人々である。内務省はベトナム人はかつての独立国の住民であることに鑑みて、今後ベトナム人は住民票その他、国籍等を記載する場合はすべてベトナム族（チュア・チャート・ユアン）、ベトナム国籍、ベトナム裁判権の管轄と記載する。尚、（１）および（２）の規定はフランス保護民証明書を有するか否かを問わず実施する。（３）国内の県あるいは郡で（１）・（２）に該当する民衆が居住している所では彼らを集めて内務省の命令を説明するとともにタイ政府の慈悲と同情心を理解させ、タイ政府の思いやりに答えてタイ政府に全面的に協力すべきことを周知させよ。中でも重要なことはフランスに利益となることやタイを害すことになることは一切行わないことであることを徹底させよ。
(NC3:3/4,or Khao Khosanakan,1941,pp.242-245)

文献 3

1940年10月20日、ピブーン首相ラジオ演説要旨

我が政府とフランスとの交渉の経緯を説明しフランスに対して我国がいかに善意を示してきたかを先ず述べたい。タイはフランスとの友好通商航海条約案交渉中の1936年に国境線改訂の件を持ち出したが仏は時を待つように求めタイは両国の友好のために引っ込

めた。その後欧州大戦開始以前に私は私に不可侵条約を提案したが私は不要と考え応じなかった。更に私は軍レベルでの不可侵合意の文書交換を求めてきたが、私は諸国の誤解を恐れて応じなかった。欧州大戦が切迫した時、私は不可侵条約を再提案した。(1939年8月一村嶋) この時私はタイが平和愛好国であることを示すため交渉に応じることとしたが、その条件として国際法と正義の原則により先ず国境線を改訂することを付した。私はメコン河の最深部を国境とすることを約し、かつ、一般的国境線の改訂についても国境線画定の協議時にタイが提案することを口頭で了承した。

タイが仏との間に不可侵条約と国境線改訂とを合意したのはタイは平和を愛し自国の建設のみを欲するという原則に基づくものであった。他国を抑圧したり、道理なき一方的利得を求める考えは毛頭ないのである。

タイが不可侵条約交渉に応じたことは適切な行動であった。交渉が成就すればタイ人が仏人にもつ怨念が軽減されることになるからであり、仏がタイになした不当な罪の数々がタイ人の記憶から消えることになるからである。将来の紛争の種もなくなるのである。フランスがその罪を払拭する方法は正しく理解しあい武力で奪取した領土の変更をなすことである。両国関係を不可侵条約を基礎とし、両国間に正義と自然国境線の原理に従った国境線が引かれるならば両国の友好は永続するものとなる。タイはこのように考えて1940年6月12日に不可侵条約に調印した。調印後タイは仏側に国境線交渉を提案した。私はタイの善意を反対に解して2回にわたって拒否したのである。仏が応じたのは只メコン河中の島の帰属について協議することだけであった。タイはこれだけでは仏の罪を払拭することはできないと考えた。罪の払拭のない限り不可侵条約の批准書の交換をしても何の意味もない。この条約は両国の友好を前提として初めて遵守可能なものとなるからである。私はこれまでの友好関係を想起してタイに国境変更の機会を与えるべきである。既に氏名が発表された合同委員会をバンコクに派遣し自然国境線と正義との原則により国境線を協議すべきである。

タイ政府の今回の要求は必ず実現されることは疑いない。それを証する根拠は枚挙に遑ない。フランスは我が領土を正義も道理もなく武力で強奪したのであるから世界はタイの要求に同情しタイに正義ありと見ている。タイ国民は自発的に義勇軍に志願し献金に努めデモを組織して支援している。タイ歴史上今回ほどタイ人が一致団結して政府を支持したことはかつてない。タイ国のタイ人に限らずラオス、クメールの地のタイ人も自らタイ人としての自由を実現したいという熱望を表示している。同じアジア人である人々、たとえばタイ内外のベトナム人もタイ政府の国境改訂要求を支持している。また在タイフランス人さえも本国政府に応じるよう求めているのだ。

今回の大仕事は政府と国民との一致団結が不可欠である。また、大仕事は怒りに任せて燃えても成功しない。冷静沈着でなければ為損ずる。タイは戦士の民族であるが、戦わなければならないときでも最少限の已むを得ない出血に止めなければならない。そこで国民に訴えたいのは次の点である。(1) 戦争を避け得ないときでも全員平静かつ冷静に、しかし勇

気をもつて自己の任務を果たすこと。(2) タイに対し不正義な国を除き諸外国との友好に努めること。クメール地区やラオス地区の我が兄弟についてはタイ族ではなくクメール族とかラオス族であると理解している者もいようがこれは間違いである。クメールやラオスはバンコク、チェンマイなどと同様地名に過ぎない。チェンマイの住民がタイ人であると同様クメール地区やラオス地区の住民もタイ人である。我々と血は同じタイであり兄弟である。しかし、自由を失いフランスの支配下に陥った。フランス人は我々と全てが異なる。クメールやラオスのタイの同胞は仏教徒だが仏はローマカトリック、我が同胞は米を食べるが仏はパン、我が同胞はゲーンやナムプリックを食べるが仏は肉食、我が同胞は黄色だが仏は白色、我が同胞は村に住むが仏は都市に住む、我が同胞はラジオをもつことは禁止だが仏は何でも持てる、我が同胞は生命財産を守るために武器をもつことも禁止、しかし仏は持てる。クメールとラオスの我がタイ同胞はタイ国の我々と全て同じである。宗教も食事も生活も習慣も同一だ。しかし憲法体制下にあるタイ国の同胞は独立、自由、平等を享有している。我々に近い民族であるベトナムもクメールやラオスの同胞と同じようなフランスの統治を受けていよう。即ち人類が受けるべき扱い以下に抑えられていよう。仏印のドクー総督は2-3日前にクメールとラオス地区を訪問しタイ同胞にタイ国の統治下に入るよりもフランスと共にいる方がいいと語ったというが、私は総督にそうであるなら我がクメールとラオスのタイ人にその地のフランス人と同じ自由と平等を与えよと言いたい。(3) 経済面では極力収入を増大させ一方支出は抑えること。もし戦争を避け得ないときは政府は情勢に合わせて善処する。(4) 国境改訂では常に軍事力を用いなければならないというわけではないことをできるだけ広範な国民に知って欲しい。どの国も軍事力はできるだけ長く温存し本当に避け得ない時だけに用いたいものだ。当面の目標だけに軍事力を使いきるわけにはいかない。将来に備えておかねばならないからである。ドイツの例にみるように小さな事件から大戦争になることもあるのだ。ドイツは大国だから耐え得るが。

軍事力の行使は最後の手段でありかつ軍事力はできるだけ温存しなければならないというのでは我が同胞はフランスと二回交渉して拒否された我国はどのようにして成功できるのかと訝るであろう。しかし、ここでは公開できないが政府が採るべき手段は幾らもあるのである。どうか落ちついて政府を支持して欲しい。領土回復は必ず成功するに違いない。私がこのように言う根拠を示してみるに、我々が領土回復を求めている理由はフランスが保有しようとする領土は我々から武力で奪取したものであるからフランスには大義名分はなくタイに正義があると考えからである。現在のフランスには国力を回復できる可能性はなく近い将来、フランスは仏印を統治できなくなるであろう。その時にクメールやラオスのタイ人それにベトナム人も自由となりそれぞれ自治をすることとなる。タイ同胞が自由になれば我が憲法体制の下に來たり、タイ国王の庇護下に入ることは問題ない。ベトナムは自由を得ればフランス侵入以前と同様彼らの国王が統治することとなろう。今の問題はいつフランスが去りタイ同胞やベトナム人が自由を得るかである。それがいつになるかは情勢の変化次第である。タイの領土回復要求はタイ同胞やベトナム人に自由独立を自覚させフ

ランスにはインドシナを去らなければならない日を自覚させる契機の一つである。さらに私は我がタイ同胞に注意を喚起したいことは我々の純粋な気持ちから発する領土回復の意思表示がタイに邪な考えを持つ者（日本を指すか一村嶋）の策略の手段として知らない内に利用されることである。（6）我々は文明国になりタイ人は文明人になった（1940年6月24日のNational Dayでピブーンが宣言した一村嶋）のであるから近いうちに自由を得るタイ同胞の模範とならねばならない。

我々は吉祥を得たことを再度知らせておきたい。現在新たな仏舎利がタイにもたらされた。（インドを訪問したタイ政府のGood will Missionがインド政府より寄贈された一村嶋）

文献4

1940年11月18日宣伝局発表。

ラオス地区（クエーン）の18歳から60歳の男子は一年に一切無報酬で16日間、官のために使役される。使役を免れるためにはタイ人（ラーオ）は一日当たり30セントを、またタイ人（カー）は12セント払わなければならない。使役は時を選ばず命じられ、耕作中でも中止して出なければならない。左岸の人民は塗炭の苦しみを受けているが、既に自分の耕地があるので他に移ることは難しい。強制労働はこの他にも道路建設などのため年60日間、わずか20サタンの日当で徴用される。もし出たくなければ代わりの人を自腹を切って高い労賃で探さなければならない。フランスに強制される左岸の人々の義務をタイ国のタイ人のそれと比較すると雲泥の差である。タイ国ではたとえ道路工事などで使役される場合でも志願制であり、一日の日当は少なくとも50サタンである。タイ政府は人民の生活福祉の向上に努め、人民にも完全な自由と平等を与えている。タイ政府はフランスの手によって苦しめられている左岸のタイ人を歓迎し農地を与え、自由・平等を等しく与える用意がある。これは同じ種族（パオパン）の左岸タイ人同胞がタイ国に住むタイ人と同様に幸せになることを願ってのことである。タイ政府は左岸のタイ人を常に心配している。（khao Khosanakan,1940,pp.2044-2045）

文献5

1940年11月5日、宣伝局声明、『クメール語の特別番組開始について』

タイ国内のクメール人同胞が宣伝局に対し、クメール地区は現在混乱した状況にありその地にいる親類兄弟の安否が心配であるし、タイ内に入ってきたクメール人は生活上困ること無く幸福に暮らしていることを彼の地の人々にも知らせたいのでクメール語の特別放送番組を設けて欲しい、双方の同胞に役に立つように放送に全面的に協力する用意があると申し出た。

宣伝局は検討の結果早急に申し出に対し便宜を与えるべきだと判断した。その理由は次の通りである。

（1）タイとクメールは他人ではなく、昔より黄金半島のタイ族（パオ・タイ）である。数

百年に亘って兄弟のように援助しあい苦楽を共にしてきた。向こう側のクメール人同胞が困難に陥っているとき、こちら側のクメール人同胞が見捨てずに消息を伝え合うためにラジオ放送を希望することは素晴らしい親類間の助け合いである。

(2) 強権によってクメール人同胞はこの国のタイ人同胞から引き離されたが、我々は種族、言語、宗教、習慣風俗などの文明をともにしている。故に心理面での衝突はなく一致団結している。現在タイ国のラジオ放送は進歩し、黄金半島の諸タイ語方言で放送できる能力がある。故に相互の良き理解のためおよび、タイ国・クメール地域双方に存在する黄金半島の文化を一層親密なものにするためにクメール語放送を始めることが適切である。宣伝局は兄弟が理解し合い親愛を増すことを禁じ得るどのような権力も世界には存在しないと考える。

よって宣伝局はクメール人の提言を全て受け入れることとした。宣伝局はタイ・クメール同胞がともに信奉する仏舎利とその他の聖なるものの力が、タイ人とクメール人の気持ちを一つのものにすることができるよう希望する。(Khao Khosanakan,1940,pp.1799-1801)

文献6

1940年11月21日、ルアン・ウィチットワータカーン「タイとクメールの種族関係に付いてサイゴン放送に答える」ラジオ放送要旨

今日はタイ国内のタイ人にとどまらず全黄金半島のタイ同胞に対し、彼らがサイゴン放送のクメールとタイとの種族関係の説明から抱くことになるかもしれない疑問を氷解させ、正しい理解が得られるように何点かをお話する。

私と種族を同じくするカムプーチャー（カンボジア）の同胞達がこの放送を聴いているものと信じる。カムプーチャーの学生諸君は私の文章のいくつかはクメール語に翻訳され広く流布しているので私のことを知っていよう。私は仏印政府からフランス極東学院の数少ない名誉会員にも任じられているので私の学識に付いてもカムプーチャーの同胞は信を置いてくれよう。

今日タイとクメールの種族関係について語るのはこの数日サイゴン放送とバンコク放送の間でこの問題について論争が戦わされているからである。

私は1936年にラーチャマヌーの脚本を書いたとき（発表は1937年10月号の『シンラパーコーン』誌、文献7参照）からタイと現代のクメールは同一Raceであると言ってきた。サイゴン放送がタイがつい最近言い出したことであると主張することは事実と反するのである。サイゴン放送はLouis Finot教授の言だとして「タイは黄金半島に洪水の如く押し寄せ黄金半島の諸民族を苦しめた。」と放送しているが、同教授が書いていることはタイの偉大さと穏和さへの賞賛であり全く逆のことである。サイゴン放送はクメールは古代において文明の栄えた民族だが、タイは未開人であったと述べているが、Theodore Guignard というフランス人は西洋（フランスを含む）の諸民族が未だ全く未開であった頃タイ民族は国家を形成し秩序だっていたと記しているのではないか。サイゴン放送はカムプ

一チャー同胞に対してタイとクメールが同一種族であるという主張はタイが地上からクメールを抹殺しようとする悪巧みから発していると盲信させようとしているが、これは道義心のかけらもない中傷である。我々は決してクメールの名を無くそうなどとはしていない。ただ、クメールとタイは同一種族だと言っているのだ。現代のクメールは古代のコームとは異なる。タイの血が染み込んでいるのだ。

クメールとタイは異なるとしてサイゴン放送が挙げる根拠は唯一タイ語とクメール語は異なるということである。しかし、言語の違いだけで種族が異なると言うのなら、フランス自身も4-5県はドイツやイタリアに渡さなければなるまい。たとえばコルシカ島の人にはフランス語をしゃべらない。言語だけが種族を決めるというのであればコルシカ出身のナポレオンの時代にはフランスはイタリアに従属していたことになる。

フランス人 **Felicien Challaye** は同一種族は次の共通点を有すると述べている。即ち、1、顔と頭骨の形、2、皮膚の色と体型、3、疾病、4、食べ物、5、音楽、6、伝説と信仰、7、家屋と家具、8、模様と色、9、記念品、10、性質。

タイとクメールはこれら10項目のどれに違いがあろうか。

学術的なことの外にタイとクメールがいかに近いかを示すものも事欠かない。クメールとタイの音楽は全く同一であるし、クメールの舞踊とタイのものも同じ型である。クメールが形式通りに劇を演じるときにはタイ語の歌詞も用いられている。クメールの上流階級と王族はタイ人と同じくらいうまくタイ語を話す。フランスが70年間もクメール人にタイを嫌わせようと努めてきたにも拘らずクメール人は依然としてタイ語を学ぶことを好んでいるし、タイと同じ方向に文化を作っている。1939年にカムプーチャー国王に拝謁したとき、フランスは国王にフランス語で会話させようとしたにも拘らず、国王は危険を顧みず私にタイ語で話し続けられた。

フランスやサイゴン放送のクメールとタイ間の離間の努力は成功しない。フランスは70年間もこれに努め成果を得ていないのである。その理由はタイとクメールを分ける証拠を探し出すことが困難であるからだ。仏印政府自身が30年前に作成した地図にはタイの血がクメールと密に交わっていることを明記している。30年前には仏印政府はタイとクメールが同一種族であるとしてタイをフランスの支配下に集めようと努めたのである。今になってタイとクメールは異種族だというのは笑止千万である。

サイゴン放送はタイがクメールにかつて暴虐を加えたと証拠を示すことなく主張し、一方フランスの保護下でクメールは幸福だと言っている。しかし、後者の主張が事実でないことはフランス人 **Andree Viollis** が6年前に出版した **Indochine S.O.S.** が良く示している。本書はフランス警察の資料をもとにフランスがベトナム人やクメール人を捕らえていかにひどい拷問を加えているかを明らかにしている。芸術局では現在本書を翻訳中である。

最も耳障りなことはサイゴン放送がクメール人とメコン左岸のタイ人がフランスに忠誠と感謝を示すためデモをしていると連日放送していることである。デモはあるいは本当のことかもしれないがそれはフランスの拷問を恐れて参加しているに過ぎない。それにイン

ドシナの人々は外部世界の情報を閉ざされている。メコン左岸の村長達もフランスが敗戦したことを知る者は極めて少ない。彼らはドイツが負けたのでフランスは戦争をする必要がなくなったと教えられている。

しかし真実が次第に知れ渡ってきた。それとともにフランスの残虐さは増している。メコン左岸の村長達は村の娘を国境詰めのアフリカ兵の慰安婦とし提供することを強制されている。アフリカ兵による強姦死も毎日生じている。天がこのような罰当たりを罰する日は近い。

タイ国内のタイ人たちは熱気だち政府に武力奪回を迫るほどになっているがこれは物欲しさや勢力拡張という考えからでは全くない。タイ人はただ正義と人道を求めているだけなのだ。我々は同族が残虐に抑圧されているのを座視しえない。タイ族は人道のためには命も賭する民族である。我々はメコン左岸とカムプーチャーの血族は我々の手であり足であるとみなしている。我々の軀はここにあるが手足は縛られ残虐の限りを受けている。その痛みは軀に伝わり耐えれないものになっているのだ。我々の手足を取り戻さなければならない。タイは民主国である。人民の意思が最高の決定者である。正義と人道のため武力を用いざるを得なくなれば我々は何ものも恐れぬ。タイは平和的方法で合意することに全力を尽くしている。平和的に解決する道はいつも開いている。しかし、戦いを強制されれば決して後には退かない。

全ての血を共にする同胞諸君！タイ国のタイ人は常に皆さんに純粋な気持ちをもっている。我々はあらゆる手を尽くして同胞のくびきを解くように努める。解放を確信しよう。戦おう、勝利は我々のものである。仏陀は悪魔を退治された。その弟子である我々も悪魔に勝つのである。

文献 7

1937年10月号『シンラパーコーン』誌上のルアン・ウィチットワータカーン作「ラーチャマヌー」でタイとクメールのraceとしての関係を記した部分。「ポーケン・シーインタラーティット王が1257年にタイ人のスコタイ王国を建国する前からタイ人は東シナ海からインド洋に及ぶ黄金半島全域に既に移り住み定住していた。古代クメール(コーム)は死滅への道を相当前から歩き始めておりそこにタイ人が代わって入ってきた。その後のクメールという呼称は仮定の名に過ぎない。今日のクメールは古代コームの直系であるという理解は甚だしい誤りである。彼らは全て我々と同じタイなのだ。古代コームは現在名を残すのみのチャムパーと同様に死滅している。今日のクメールは古代コームの地にたまたま入り込んだためコーム風に全てを訓練され、それでクメールという仮の名で呼ばれることになったタイ・ノイの一派である。丁度タイ・ノイの別の一派がラー族と混血しラーオと呼ばれているのと同様である。本当は共にタイ人なのだ。歴史家がRaceを証明するのに用いる基準、即ち顔の形、頭骨、食べ物、よくかかる疾病、民話、音楽の調べについてタイと現代のクメールを比較すれば、現代のクメールは間違いなくタイであるという

結果がえられる。(p.58)」

文献 8

1940年12月15日、ルアン・ウィットワータカーンの「タイ民族は勝利する」ラジオ演説

本日の『タイ民族は勝利する』ではタイ民族とは現在タイ国に住む人々のみならずメコン左岸とカムプーチャーの同胞も含んでいる。というのは現在進行中のタイ民族の独立回復と統一のための闘争はタイ国内の我々のみならずメコン左岸とカムプーチャーの同胞も共に戦っているからである。我々はフランスの不正義と残酷さと戦うために力を合わせている。この闘争は未だ直接的な戦争ではないが、間接的な戦争と言っても差し支えない。メコン左岸の同胞達は毎日フランスの電話線を切断し、交通輸送を妨害している。機会があればフランス人を殺害している。我がクメール同胞も同様である。フランス人将校の何人かはクメール人に殺害された。メコン左岸のタイ人のなかには数多くの人々が今後フランスには税金を払わないと宣誓し、彼らが自らの民族であり自らの国であるとするタイ民族とタイ国への忠誠を宣言している。もし誰かフランスの代弁をするものがいようものなら民族への裏切り者として暗殺される。メコン左岸とカムプーチャーには激しいナショナリズムが生まれ広がっているのだ。・・・故に民族独立戦争は既に間接的には生じているということができるのである。直接的な戦争が起こるかどうかは状況と必要性次第である。しかし、どのような戦争であれ結果はタイ民族の勝利となる。奪い去られ分離されたタイの地が再び一つのものとなるのだ。

このように断言するのは誇大妄想や自慰ではない。我々はすべての面で優勢なのだ。正当性、戦意、戦闘力、経済力、全てに優っている。・・・

(1) 正当性、戦争になると当事国は自らに正当性があることを宣伝するがこれは2つの目的がある。1つは自国の戦意高揚、2つは世界各国の支持を得るためである。仏印も宣伝に努めてはいるが仏印を支持する国は1つもない。真実に立脚しない宣伝は効果がないからである。私は外国ニュースを丹念に読み、どこに行くにもラジオを携帯して外国放送を聴いているがこれまでタイが間違っておりフランスが正しいという報道に接したことがない。いくつかの国からはこの地域に戦争は生じさせたくないという心配の声が発せられているがそれらの国もタイに同情し、タイに正当性があると見ている。ただ戦争ではなく平和的な方法によって合意ができることを願っているのだ。その理由はいくつかの国の指導者はタイ仏間に戦争が生じれば極東の他の国の間にも戦争が起こり大戦争になることを恐れているのだ。・・・フランスは自国の味方を探しているが一国もない。フランスは不当にも妨害電波によってバンコク放送が国境で聴かれないようにし、また、外国人記者が仏印からタイに入ることに妨害している。それでも敢えてアランヤプラテート国境まで入ったオランダ人記者を殺害し、タイにその罪を着せた。

とにかくフランスは道理が判る諸国民のなかに味方を得ることはできない。というのはタイとフランス間の紛争は簡単な理由に起因するものなのであるから。フランスは我々の国土人民財産の半分をも強奪したのであるから、我々が返還を求めることは全く正義にかなっているのだ。我々は奪われたもの以上のものは求めていないのだ。さらに世界の公正な国にはタイの行動は迷惑をかけたかどちらか一方に傾斜したものではないことが判るであろう。欧州に大戦が生じて1年あまりタイの政府も国民もこれ以上望めないほど厳正に中立を守ってきた。政治的意見を自由に表現できるタイの新聞でさえどちらかに偏したことはなかった。我々は自らのこと以外には関わらないのである。タイの政策と目標は簡単明瞭である。故に我国と接する国は我々の意図を明白に理解でき、何ら疑念をもつ必要はないのである。我々のやり方は一つ、正面から堂々と正直にやるのである。我々の目標も一つ、正義である。ゆえに正当性は我らにある。

(2) 戦意、タイ国の1400万の人民は一致して政府を支持している。むしろ人民の方が政府より先に進んでいる。・・・

メコン左岸の同胞とカムプーチャー人の戦意も高い。12月5日に私がスリンを通過したとき同県知事がタイ側に加わったクメール兵の一隊をつれてきた。その長はフランス語の上手な将校で私にフランス語で報告し最後に早くタイはフランスと戦って欲しい、タイ民族のために全てを捧げると語った。

9月から今まで私は国境地帯を巡回しているのでメコン左岸のタイ人の気持ちはよく判っている。彼らは近いうちにタイの家族に加わることを待ち望んでいる。

(3) 戦闘力、これは兵器と兵隊とがあるが、兵隊のみについてみる。フランスは既に土民兵であるベトナム、クメール、メコン左岸のタイ人兵を信頼できなくなっている。フランスは武器をこれらの兵士に与えることは出来ない。フランスの最後の頼みはアフリカ兵であるが、11月16日のウボン国境に進攻してきた仏人将校指揮下の150人のアフリカ兵が臆病にもすぐに逃げ帰ったことにその力のほどは示されている。

フランスはメコン河で何ヶ所も兵隊を載せた小舟をタイ側に接近させタイ側に銃撃されると逃げ帰るということを繰り返している。12月2日のスワンナケートからの渡河は私自身の身近で生じた。どうしてこのようなことをフランスがやるのかは疑問であったが、スワンナケートから来たタイ人の話を聞いて疑問は解けた。フランスは対岸に進攻渡河すると称して村民を避難させ村民の眼がなくなったところで兵士を乗せた小舟をタイ側に向けて出すふりをする。しかし、途中で引き返し兵士はトラックで村民の眼を避けるため遠くに運び去っているのだ。しかし、村民に対しては渡河した兵士はバンコクに向かい進攻中というビラを配るのである。このようにフランスは一人芝居を演じているのだ。戦闘がある度にフランスが行う宣伝はサイゴン放送と土民に対するビラとは内容が異なる。サイゴン放送では諸国の同情を引くためタイ側が先に侵略したと常に言っているが、メコン左岸の人民に出しているビラではタイから受けた被害とかタイが先に進攻したとかは記さずいつでもタイを懲らしめることができるといった調子で書かれている。11月27日に(28日が

正確一村嶋) 仏機が爆撃を開始しナコンパノムに一発爆弾を落とし我が方はターケークに三発爆弾を見舞った、その後仏側は何日も静かになったが、このことに関するビラでは「フランスはナコンパノムは重要都市ではないので爆撃は今後はない、バンコクを直接爆撃するのだ。現在バンコクはフランス機の爆撃で惨状を呈している。仏軍もバンコクに迫っている。」と記している。

フランスについてのもう一つの疑問はフランスは再起不能なほどドイツに負けたのに、身を小さくしているどころか大胆にも我が方に対し進攻を開始したのはなぜか、かつ進攻してきて反撃されると陸海空を問わず直ぐに逃げ帰り、その後に再び同じことを懲りもせず繰り返すのはなぜかということである。私は国境を巡回しているので自らほとんどの事件に立ち会ったし、そうでないときも本当のことを現場にいた人から聞いたが、私は国境で生じている事件は全てフランス側が先に仕掛けたものであると誓って断言できる。信じられないなら自ら国境に行けばわかる。そんなことをしてフランスに何の利益があるのだろうか。その答はフランスが我が方に対する攻撃をやめたなら、フランスはもはやインドシナに居座ることができなくなるからである。フランスが今日インドシナに居れるのはかつてと同様にタイなどはいつでも懲らしめることができる、タイを侵略するくらいの力は十分にあるということを誇示することによってである。それで兵をタイ側に上陸させたとか、どこそこを占領したとか称して人民を欺き、たまにメコン河越えに砲撃してタイなどいつでも攻撃できるぞと人民に思わせようとしているのだ。

(4) 経済力、インドシナは食料不足が激しく日本からのラジオ放送では3カ月しかもたないという。その理由は耕作してもフランスに取り上げられるだけなので農民が耕作しないからである。又、本国政府からも多額の送金を求められていることはサイゴン放送さえ認めている。

以上述べてきたように4つのどの点においてもタイ側は優っている。私は最近の新聞インタビューで仏印は戦っても戦わずとも待ち受けているのは死だと答えた。タイとの間の紛争の外にも諸困難に直面している。12月9日のマニラ放送はハノイで日本軍とフランス軍間に衝突が起こったこと、また広西と仏印国境には中国軍5師団が集結していることを報じたし、12月10日の日本のラジオ放送は仏印政府発表として南ベトナムの反乱は全地域に拡大の勢いであると報じている。このように仏印の困難は隠すことはできないのだ。

総じて私はタイ民族の勝利を確信しているのだ。

フランスが支配下の人民を騙すためにタイに見せかけの進攻をしていることを人民も知りつつある。効果がないと知ったフランスは狂ったようにタイに対して過激さを増している。フランスは自己がインドシナで存在し続けるには自己の支配下の人民を弾圧するだけでは不十分でありタイ国を害さなければならぬと決心したことは明かである。タイを正面から害することはできないのでフランスは様々の策略を弄している。最近の仏・英語のサイゴン放送はタイから痛めつけられている、助けてくれといった哀願調の放送をしている。

しかし世界はフランスが先に我々に悪事を働いたことを知っているのも悪い方に与することはない。それにフランスは誰にたいしても恩を仇で返す忘恩者であり、自分だけが優れていると自惚れる民族である。フランスは第1次大戦で米英の援助を受けたにも拘らず戦後はすぐに関税障壁をもうけ米英の商品を妨げた。タイのフランス留学者は、ピブーン首相を含めてフランス教師からアメリカは文化の無い国だと教えられたものだ。ところが今回大戦でパリが陥落しそうになるとフランスは恥ずかし気もなくアメリカに援助を求めた。日本人に対しては最も侮辱している。日本の繁栄を評するフランス人の言葉は *C'est un statut colossal au pied d'argile* である。日本はみずぶくれしているだけというのである。中国人について語るときフランス人は *Sale Chinois* という表現を好んで用いる。汚い中国人と言う意味である。タイ人留学生は中国人と間違えられしばしばこの言葉を浴びせられた。

今日の夕方サイゴン放送はタイはフランスが敗戦した時を捉えてフランスを害しようとしているという主旨の放送をした。しかしこれは最近のことを想起すれば事実と反することは明かである。ドイツ軍がパリに迫っている時タイはフランスと不可侵条約に調印したが（1940年6月12日一村嶋）、その時同じサイゴン放送の同じアナウンサーがタイに感謝して「フランスが窮しているときタイは依然友好心を持ち続けて条約に調印する名誉を与えた」と言ったことを鮮明に覚えている。フランス敗戦後もタイは国境画定のためのフランス代表団の入タイを待ち代表団の名さえ発表したが誰も来なかったではないか。1940年6月24日のタイのナショナルデーの日にはサイゴン放送はフランスの敗戦後も友好を維持しているタイに感謝するためにタイ国歌を放送しているではないか。こられはタイがフランスの敗戦を捉えて侮辱したというサイゴン放送の言いがかりに対する明白な反証である。今日の紛争はタイが起こしたのではなくフランスが言を違え変心したからではないか。約束した国境画定代表団派遣は実行せず、かえって国境画定前に批准を求め、タイが応じないと軍事力を見せつけ国境線を越えて飛行機を侵入させ、ウィエンチャンではチャンター氏を撃ち、ノンカーイではタイ機に発砲し、チャムパーサク国境では侵入した。それでもタイは我慢したが11月27日に仏機がナコンパノムを爆撃したので、ついにタイも反撃したのである。これに対しフランスは敗戦時にタイが悪事を働いていると哀願しているのである。真実とフランス人の性格を知る世界の国々はだれも助けるものはいない。